

三翠化学会

平成三十年度総会報告

久松氏 三翠同窓会会長に就任



翠会の同窓会開催の年であり、三翠化学会は、親会開催に便乗する形で総会のみ開催となりました。また、親会は生物資源学部創立三〇周年で、その記念講演会もあり三翠化学会総会、三翠同窓会三重支部総会、三翠同窓会総会、生物資源学部創立三〇周年記念講演会、そして祝賀会(三翠同窓会懇親会と共催)と盛り沢山のスケジュールで、三翠化学会総会もコンビニの軽食を食べながらの一時スタートとなり、全スケジュール了は一八時を過ぎていました。

三翠化学会総会は、会員二三名が参加し、生物資源学部長の選出を要請され、久松眞(修8 三重大学名)

令和元年度三翠化学会 同窓会のご案内

日時 令和元年10月12日(土曜日)
11:00 受付開始
総会 11:30~12:00
講演会 12:00~13:00
講師: 吉岡 基氏(本学教授)
演題: 「クジラとイルカ、捕鯨を取り巻く最近の動き」
内容: 日本では、古来から鯨類を重要な水産資源として利用してきた。しかし、1970年代にクジラが環境保護のシンボルとなって以降、日本は、国際世論の影響を受ける中で、商業捕鯨の中止と「調査捕鯨」の実施、イルカ漁業の存続や水族館でのイルカ飼育の問題に取り組んでいる。講演では、こうした鯨類を対象とした漁業等の現状と課題について紹介する。
懇親会 13:15~15:15(鯨料理を用意する予定)
会場 総会、講演会: 生物資源学部大講義室
懇親会: 三重大学生協 第1食堂
懇親会会費 5,000円

(題字は稲川先生)
第68号
令和元年8月8日 発行
三翠化学会
津市栗真町屋町1577
三重大学大学院生物資源学研究所内
電話 / (059) 232-1211
振替 / 00890-1-59345
印刷 / 株式会社 あるむ
TEL (052) 332-0861 大8 長谷川 正一

研究科長・学部長就任のご挨拶

生物資源学研究所長 生物資源学部長 奥村克純



本年四月より研究科長・学部長を拝命しております奥村克純(おくむらかつづみ)です。梅川先生がたいへんうまく管理運営された(当日数時間後の三翠会総会で無事会長に選出されました。これにより三翠化学会からは、三翠化学会創立以来四十数年を経て、初めての三翠同窓会会長が誕生しました)。ということに全議案共満場一致で承認されました。

生物資源学部創立三〇周年記念講演会は、大講義室で開催され、三重大学学長、三翠同窓会会長のあいさつに続いて、大学院生物資源学研究所長の梅川逸人先生による「生物資源学研究所の変遷と現在」、三重大学名誉教授天野秀臣先生による「農学部+水産学部+生物資源学部」創設時とその後「のエピソード」の講演があり、生物資源学部の創設と変遷についての紆余曲折の三〇年について、その苦労話やエピソードを話されました。

祝賀会は、生協第一食堂で開催され、約一五〇名の農学部、生物資源学部の同窓諸氏が参加されました。三翠化学会からは約二〇名が参加され、他学科の同期の諸氏と何年振りかの旧交を温め、交流をはかられました。一時を過ぎさるる

三翠同窓会会長としてのご挨拶

久松 眞(院8)

三翠同窓会の会長はこれまで志茂会、林学会、農学会から選ばれてきました。折の三〇年について、その苦労話やエピソードを話されました。

祝賀会は、生協第一食堂で開催され、約一五〇名の農学部、生物資源学部の同窓諸氏が参加されました。三翠化学会からは約二〇名が参加され、他学科の同期の諸氏と何年振りかの旧交を温め、交流をはかられました。一時を過ぎさるる

田中晶善先生最終講義並びに退職記念パーティー行われる



卒業生や共同研究者に向けた最終講義が行われました。最終講義では「三重大学での三七年」というタイトルで赴任時から学部移籍時のエピソード、研究人脈についてお話しされました。最終講義の後、学内のパセオで、退職記念パーティーが和やかな雰囲気の中で行なわれました。卒業生だけでなく、多くの共同研究者や教員も参加し、同研究者や教員も参加し、二次会が遅くまで続きました。また、田中先生の退職記念ホームページが研究室のホームページからリンクされています。

http://telescope.life.coocan.jp/retirement/index.html (文責 勝崎)

両先生をはじめ、学部長をされてきた熊澤先生や農芸化学科、ならびにその後の組織変更に伴ってお付き合っていた先生方に何かにつけてご指導いただき、加えて、三翠化学会の先輩の方々にも懇意にお付き合いいただき、素晴らしい経験をさせていただいたおかげで今があると感謝に堪えません。今年で三五年目となりますが、なんとか職務に専心し、任務を担っていく所存ですので、何卒、よろしくお願いたします。

私は、嶋林先生に呼んでいただき、昭和六〇年四月に三重大学農学部農芸化学科生物化学講座の助手として着任しました。大学院出たての助手ですから、極めて未熟で、研究室の嶋林先生、田口先生には大変ご迷惑をおかけし、様々な便宜をはかっていただきました。おかげでのびのびと過ごさせていただきさらに、

大42回・修士29回同窓会

大42回生と修士29回生の第3回同窓会を平成30年9月8日に幹事である杉井・西尾のもと津駅にある伊勢門本店で開きました。最初に、故緒方進君の今までの功績を偲んで全員で献杯をしました。今回の参加者は、大42と修29の卒業・修了生で写真の右から佐野、杉井、橋本、三島、杉浦(旧姓:菰田)、伊藤(旧姓:吉原)、渡辺、佐々木(旧姓:宇佐美)、卯川、西尾ですが、佐々木さんが初めての参加でした。同窓生どうし三重大の学生時代から現在まで満足いくまで語り合いました。同窓生は、40歳台もあと少しになっておりますが、学生時代と変わらず皆生き生きとしていました。戦々恐々とするよりも泰然自若である方が良いですが、大42・修29は過去にどんな状況でも落ち着いているの現在があるのを実感しました。是非とも同窓生から、就職を決めた後輩達にも自分が築いたものなどを語ってくださいね!

同窓生は、遠くは新潟から津まで集まってくれたことを考えると、大学時代の友人は死ぬ時まで友人であるんだと胸に刻み直しました。前回に決定した4年に一度同窓会を開くことで、開催に至っていましたが、これからも開いていくことを参加者全員で一致し、次回は杉浦夫妻に任せますので宜しくお願いします。

西尾昌洋(大42回・修29回)



第一五回三翠化学会関東支部総会および
講演会・懇親会を開催

第一五回支部総会および
講演会・懇親会を開催

第一五回支部総会および講演会・懇親会が平成最後の年、三月十七日(土)一時から日本橋室町の三重テラス・イベントスペースで開催されました。

東海副支部長(大19)が全体の進行をすすめ、総会に先立ち飯田副支部長(大23)から開催案内・参加状況の報告がありました。

二〇〇名に案内(内メールが一〇七名、葉書が九三名)し、回答者は一〇二名で回答率は五三・五%でしたが、昨年同様、メールの回答率の方が六五・四%と高く、しかもハガキでの参加者はゼロでした。今回は、例年より少なく二名の参加でしたが、この会を知り、生物資源学部平成三〇年・第一五回卒業の吉長高嶺君が出席したことは特筆すべきで、平成の一番若い

世代が参加した歴史的な総会となりました。吉田支部長(大18)の開会挨拶の後、杉崎三翠化学会会長から来賓の挨拶があり、生物資源学部の組織体制(教員)について紹介があり、後援会の今後の見通しと課題について報告がありました。

引き続き総会に入り、東海副支部長(大19)が議長に選出され、議案の審議を行いました。第一号議案は平成二九、三〇年度関東支部活動報告で、吉田支部長から第一四回支部総会、第八回交流会、第六回・第七回ゴルフ大会の報告(機関誌「三翠化学」、ホームページ参照)、今期一〇回開催した支部委員会の活動概要を報告しました。次いで第二号議案の会計報告が平田副支部長(大20)から、

併せて中島監事から監査報告がありました。その後第三号議案で、支部委員会の財政状態は脆弱であり、支部運営の継続性に支障をきたす状況であることから、「支部運営協力費のお願いについて」を提案、更に第四号議案で任期満了に伴う役員改選が審議され、役員改選については、長年活躍して頂いた浅井副支部長が退任され、新たに別所明氏(大26)が役員に、更に吉田、東海、平田、丹羽、飯田、蛭雄、中島各氏は再任され、今期も八名体制で運営することになりました。

恒例の講演会は、役不足ながら筆者である吉田が「私にとっての野球人生の一ページを語る」と題して、中学校は投手で県大

会準優勝、高校では夏の全国大会に一番バッターで出場、三重大学では二回の全日本大学選手権出場を果たした時のエピソード、私にどアドリブで語りました。その時に受賞した優勝メダルやアルバムなども披露しましたが、高校での全国大会出場記念メダルは皆さんに興味を持って頂いたようでした。大学では、現在の野球場の設計を当時の嶋林部長に依頼されたこと、ラウンドの下に二回目に登場した時持ってきたこと、練習では、センター奥の陸上競技場の器具倉庫、ライトはプールまで飛ばしていたこと、東海大学の投手から敬遠されたことなど、何か自慢話になるようで恐縮と云いながら、数々の思い出を熱く語ってしまいま

次いで、集合写真の撮影を行った後、丹羽副支部長(大22)の進行のもと、鈴木潔先輩(大9)の乾杯の発声で、恒例の懇親会が始まりました。前回の交流会と同様、「三重県の旬堪能コース」二時間の飲み放題プランで、ビール、ワイン、三重県産の地酒(日本酒)、キンミヤ、伊勢茶割り、伊賀半蔵の梅酒、三重県産のソフトドリンクを堪能し皆さんご満悦でした。参加者もあつという間に過ぎました。

大34回の酒井和好氏の締めと、浅井副支部長の指揮で「三翠応援歌」を大合唱し、次回の交流会の参加を約して懇親会を終えました。

終わりに、今回の総会の出席者(敬称略)を紹介し、報告とさせて頂きますが、吉長君のような若い世代が参加していただくことを期待してやみません。

関東支部第7回ゴルフ大会を開催
～優勝は大20回の平田友良氏、初優勝～

関東支部第7回ゴルフ大会を平成30年6月6日(水)、取手桜が丘ゴルフクラブ(茨城県)で開催しました。ここ数年は同じコースで開催しており、今大会は新ペリアではなく初めてハンデ戦で順位を決定することにしました。急用で当初の参加予定者から2名不参加となり、大15回から大26回の方7名2組の大会となりました。

本コースはJR常磐線藤代駅に近い(車で5分)名門コースで、フラットなコースですが、池、クリーク、バンカーが随所に配置されており、嵌まると大たたきするコースです。当日は梅雨入り宣言となった日ですが、雨が降ったり止んだり、この時期としてはまずまず天候に恵まれ、和気あいあい、一日中楽しいゴルフでした。

競技は、大20回の平田友良氏が、ネット73(ハンデ30)で、初優勝しました。吉田吉明氏(大18)は、ベスグロの86でしたが厳しいハンデのためネット75(ハンデ11)準優勝に甘んじました。3位は初参加の別所明氏(大26) ネット75(ハンデ21)。

ブービー賞は長島貞武(大15)。因みに、ドラゴン賞は長島・小島両選手、ニアピン賞は長島、小島、別所、菅原の各選手でした。

プレー終了後表彰式を行いました。近況報告もあり、笑いに包まれた懇談会でした。話題は尽きませんでしたが、遠路の方もおり、来年度の新しいハンデを決定し来年の好プレーを約して散会しました。

三翠化学会会員の交流をさらに深めるため、6月上旬を予定しています。今回は新しいメンバーが加わりましたが、例年メンバーが固定化しており新しい仲間の参加を待っています。参加賞として今年もネーム入りボール「2018 三翠化学会関東支部」を1スリーブ配りました。これも楽しみの一つです。三翠化学のホームページでもご案内しますので、次回も多くの方の参加をお待ちしています。また、関東支部以外の方の参加も大歓迎で、ゴルフを通して支部間の交流を深めて頂ければ幸いです。

今大会の出席者(敬称略)は、小島楯彦(15)、長島貞武(15)、吉田吉明(18)、平田友良(20)、飯田徹也(23)、別所明(26)、菅原博(26)でした。(関東支部副支部長 飯田徹也)



終わりに、今回の総会の出席者(敬称略)を紹介し、報告とさせて頂きますが、吉長君のような若い世代が参加していただくことを期待してやみません。

訃報

分子細胞生物学助教緒方進氏におかれましては、病氣療養中のご逝去になりました。謹んでお悔やみ申し上げます。

皆様からのご厚志は随時承っています。金額の多寡にかかわらず喜んで頂戴いたします。郵便局よりの振込には、表紙題字の下に記載の振替口座番号宛お振込みください。銀行やコンビニATM等からでも振込は可能です。その際は、使用可能な銀行キャッシュカードをご使用いただき、銀行名: ゆうちょ銀行 金融機関コード: 9900 預金種目: 当座 店名: ○八九店(ゼロハチキユウ店) 口座番号: 0059345 にて振込手続きをお願いします(振込手数料は当方負担とさせていただきますので手数料分を差し引いてお振込みください)。 会計担当 木村(大25回)

記事募集

会員の皆様からの投稿をお待ちしております。内容は会社の紹介をかねた個人の近況、クラス会を開催した時の報告、個人の趣味を披露したい場合等ございましてお願いいたします。あわせて、つかし写真も募集しています。

本年三月、一六年振りに四一名の新卒業生が三翠化学会に入会してくれました。まずは学部の卒業、修士課程への進学、社会人へのスタート等にお祝いの言葉を送りたいと思います。「おめでとうございませう」そして、三翠化学会への入会大変喜ばしいことです。我々三翠化学会の同窓生としては、一五年間どんなに待ち望んでいたことでしょう。例えば、平成一二年に生物資源学部三学科が設置され、旧農芸化学コースは、研究室が二つの学科に分割されました。資源循環学科に、土壌肥料学、醗酵学(応用微生物学)、栄養化学、食品化学が、生物圏生命科学科に生物化学、農産物製造学(農産物利用学)、農薬化学(生理活性化学)、分子生物情報学が置かれました。すなわち三翠化学会の母体である「農芸化学」というくりがなくなってしまう、四年後の一七年三月の学部卒業生からの三翠化学会への入会はなくなりまし。当時は、新しい学科別に同窓会が設立されるだろうとの考えがあったのですが、その後新しい同窓会が設立されることはありませんでした。

若い力の入会が途絶えた一七年以降、三翠化学会の同窓会活動は低迷し、親会三翠化学会の同窓会に便乗する形で細々と運営されてきました。数年前より学部改組のニュースも伝わり、新しい卒業生を待ちわびながら、三翠化学会開催年度と交互に隔年で、三翠化学会独自の同窓会を、総会・講演会・懇親会の三本立てで開催するように頑張ってきました。

三つ目は、三翠化学会の活動に若い力を貸していただきたいのです。若い人の考え方、センス、趣向を同窓会運営に反映して、若い人の活力、機動力、企画力で活気ある楽しい同窓会づくりに参画していただきたいのです。同窓会の潜在能力からどんな力を引き出すか、それは、第一線で活躍している(またはしようとしている)若い力が主人公となつて企画していくのが一番です。幹事となつて運営の実務に携わっていただくことももちろんですが、総会での発言、会報への寄稿など機会あることにご意見をいただくことも非常に貴重だと考えています。三翠化学会は昭和四八年に、嶋林先生を初代会長にして創立されました。創立後十数年は会報を年に二回発行し、同窓会イベントも同窓会幹事全員が色々と企画し、準備作業を分担し、先輩、後輩一体となり、イベントを盛り上げるため一生懸命に頑張っていました。演習林に一泊し皆でカレーづくり、宮妻峽キャンプではスイカ割り大会、宮川での魚の掴み取り、付属農場でのパーベキュー大会など同窓会、特に子供たちが喜び企画も折り返し同窓会を行っていました。特に榎原温泉一泊で行なわれた同窓会には一四〇余名が集い、翌日散会になるまで参加者の正確な人数が把握できなかったくらい盛況でした。

昭和時代の三翠化学会の姿に戻ることにはなかなか難しいと思いますが、今一度同窓会の目的、あり方を見直し、強固な絆を繋ぎ続けて行きたいのです。そして、一六年振りに新卒業生が本会に入会してくれたこの機会に、二年に一度の同窓会というお祭りを盛り上げて行く心意気を同窓生全員で持てる同窓会にしていきたいものだと思います。

十六年振りに新卒業生 三翠化学会への入会
同窓会活動に若い力を、そして全員の力を

同窓会活動に若い力を、そして全員の力を

な分野で活動されている先輩、後輩と交友を結び、絆を深めることにより、自分の仕事の幅を広げ、趣味の世界での交流をつくり、困ったことがあった場合は助け合い、また、人生上の素晴らしい人との出会い等同窓会のメリットを享受していただきたい。同窓会のメリットは皆さんの考え方と行動次第で無限に広がっていきます。

三つ目は、三翠化学会の活動に若い力を貸していただきたいのです。若い人の考え方、センス、趣向を同窓会運営に反映して、若い人の活力、機動力、企画力で活気ある楽しい同窓会づくりに参画していただきたいのです。同窓会の潜在能力からどんな力を引き出すか、それは、第一線で活躍している(またはしようとしている)若い力が主人公となつて企画していくのが一番です。幹事となつて運営の実務に携わっていただくことももちろんですが、総会での発言、会報への寄稿など機会あることにご意見をいただくことも非常に貴重だと考えています。三翠化学会は昭和四八年に、嶋林先生を初代会長にして創立されました。創立後十数年は会報を年に二回発行し、同窓会イベントも同窓会幹事全員が色々と企画し、準備作業を分担し、先輩、後輩一体となり、イベントを盛り上げるため一生懸命に頑張っていました。演習林に一泊し皆でカレーづくり、宮妻峽キャンプではスイカ割り大会、宮川での魚の掴み取り、付属農場でのパーベキュー大会など同窓会、特に子供たちが喜び企画も折り返し同窓会を行っていました。特に榎原温泉一泊で行なわれた同窓会には一四〇余名が集い、翌日散会になるまで参加者の正確な人数が把握できなかったくらい盛況でした。

昭和時代の三翠化学会の姿に戻ることにはなかなか難しいと思いますが、今一度同窓会の目的、あり方を見直し、強固な絆を繋ぎ続けて行きたいのです。そして、一六年振りに新卒業生が本会に入会してくれたこの機会に、二年に一度の同窓会というお祭りを盛り上げて行く心意気を同窓生全員で持てる同窓会にしていきたいものだと思います。

第二十回三翠化学会 関西支部交流会報告



重ね、現在も活動を続けております。これも支部の活動を支えている三翠化学会本部、毎回の交流会に際し、これまでご講演を引き受けてくださった講師の皆様方の多大なご協力があってのこと、心より御礼申し上げます。

昭和五十九年に第一回総会が開催された三翠化学会関西支部は、平成一三年からは、名称を支部総会から交流会に変更し、毎年開催を

今、私は

三重大広報誌取材で感じたこと

南千代子 (旧姓佐藤・大40)

皆様は三重大大学の広報誌『三重大X(エックス)』をご存知でしょうか？主には三重大の取り組みなどを紹介する情報誌のようですが、その中に三重大卒業生の活躍について紹介するOB・OG特集コーナーがあります。縁あって、先日この三重大XのOB・OG特集に参加させていただき

私は二〇〇四年に生物化学研究室(分子細胞生物学研究室)を卒業し、三重県四日市市にありす太陽化学株式会社に入社しました。以降、一三年間は機能性食品素材を扱う研究員と

の生き残りをかけ、現在も活動をすすめている」とのお話を伺い、法人化されて置かれていることを実感しました。そして現在の先生

「伊賀といえば忍者だが、地域の特徴を生かした忍者の研究も大学として生き残る活動の一環である」

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「伊賀といえは忍者だが、地域の特徴を生かした忍者の研究も大学として生き残る活動の一環である」

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

「忍者の認知度は高いが、理系の視点からの研究は皆無だったので、自分の専門(食品化学)を生かし、忍者が要求される情報収集力、スト

第21回三翠化学会 関西支部交流会のご案内

日時：令和元年11月16日(土)午前11時から
場所：ホテルクライトン新大阪
談話会特別講師：奥村克純氏(三重大学生物資源学部長)

最新の知見に触れ、三翠化学の同窓生と楽しく語り合う絶好の機会です。お誘いあわせの上、是非ご参加ください。



開催決定後に、鳴林先生の卒業、奥村先生の学部長、研究科長ご就任内定、竹林先生の研究室准教授ご就任とまたお祝いの声が多くなりました。同門会は三月二日春分の日に開催され、計画段階の予想を大きく上回る七〇名を超える同門生に参加いただきました。上は九〇歳から下は二〇歳までと四分の三世紀の差がありました

Gから昔話、近況報告をいただきました。酒は飲み、話は弾み、宴たけなわとなりましたが、楽しい会もお開きの時間が近づき、応援歌を早川氏、中北氏(いずれも大27)の音頭で声高らかに熱唱し、閉会の締めを平田氏(大17)にさせていただきました。庶務幹事の田中氏(大25)から諸事連絡があり、随時散会となりま

今後、同門会は毎年春分の日前後に開催し、同門会の交流を深めたいと思っています。因みに来年は三月二日(日)を予定しています。今から日程調整をお願いします。また、来る人は拒まず、他の研究室の方も大歓迎です。多数の参加を期待しています。古山順啓(大24)

生物化学、分子細胞生物学研究室同門会

近年、同門会としては、鳴林先生の受章のお祝い、鳴林、田口、奥村三先生の米寿、古希、還暦のお祝い事が重なり同門生が集まってきました。そして、今後さらに定期的に親交を深めたいとの声が大きくなり、今般同門会を開催する運びとなりました。

最後に今回の出席者を紹介し、報告とさせていただきます。鳴林幸英(専一)、柏村直樹(名誉教授)、久松眞(院長)、杉崎護(大16)、木村幸信(大25)、酒井敏秀(大16)、吉田吉明(大18)、小林紘一(大12)、高木饒(大12)、谷中国昭(大13)、内田勝啓(大15)、大北明(大16)、古橋雅巳(大19)、松本孝(大19)、伊藤哲雄(大21)、浅井以和夫(大27)、堀英一(大28)、小川悦代(大30)、田宮敏昌(大36)、岸田吾一(大36)、西本和実(大33)(敬称略) 西本和実(大33)

貧乏人の子沢山の家に育ったので大学は半分諦めていました。アルバイトをして自宅から通学する条件で大学を受験し入学しました。でも、特に何かをしたいとか何かになりたいといったものを持っていませんでした。

現在の大学は学部も学科も理解しづらく仲間意識も希薄になってきています。三翠化学会の発展を祈っています。



今、私は

学生時代の思い出『こうり』

岩佐則武(大12)

ガリ版刷り手作り農芸化学科機関紙『こうり』を知っていますか。先生と生徒の縦横のつながりを大切にしようとした村田さん(大9)が創刊されたものです。編集発行担当は三年生でした。後期高齢者になり身辺整理をしていて物置で見つけました。第四号で大学二年生の時に受け取ったものです。大12回のクラス会で鳴林先生にお伺いいたしました。先生は第一号をお持ちでした。

大三六期 ミニ同窓会



「同窓会」の名目で集まるのは久しぶりで、家庭もあり、また所在地も日本各地に散っているのに、まるの難し。その割に名古屋組を中心に東京、大阪からと、急ごしらえの計画の割に中々の成績でした。他方、日程が合わず参加見送りメンバーも数人。次は準備期間をしっかりと取って、出来るだけ沢山参加できるようにしたいものです。また、この後の五月末、ミニならぬ五人で集まったマイクロ同窓会も東京で実施。ここでは卒業以来三〇年ぶりの再会がありましたことを付け加えておきます。

安心ください。予定していた二時間はあつという間に過ぎ去り、学生時代なら下宿になれ込んでいたところ、節度ある大人の我々としてはそれが家路に。と言いたいところですが、実際のところ当てもなく次の場所を探し、見当たらないので流れ解散でした。

このあたりの無計画さは当時のまま。やはり身に付けたのは歳と皺の数だけのようです。なお、件の日君

は恒例の泥酔一步手前度路につきました。何で家に辿り着けるか未だに不思議です。

着任のご挨拶



竹林慎一郎

私は、現研究科長の奥村克純先生の指導の下、平成一四年三月に生物資源学研究室(現分子細胞生物学研究室)で教育・研究に携わる機会を得られました。立大学、熊本大学、三重大学医学部と研究の場を移してきましたが、この平成三年三月一日に生物資源学研究室の准教授として着任しました。

くことへの期待や不安と共に、入学以来九年間も過ごした生物資源学を去ることに少し寂しい思いがいたことが今でもほつきりと思ひ出されます。この度、教員として出身の生物化学研究室(現分子細胞生物学研究室)で教育・研究に携わる機会を得られました。大きな喜びを感じております。学生時代にお世話になった先生方をはじめ、皆様には温かくお迎えいただき、心より感謝申し上げます。母校に勤務する幸せを実感する毎日です。

私はいままで一貫して、細胞の中にあるDNAの構造変化について研究してきました。東海支部懇親会はどなた様の参加も歓迎いたします。お気軽にご参加ください。

吉田小百合(大45、生5)

三重県大台町との共同研究において、未利用資源を有効活用した特産品の茶葉に含まれる成分の機能性の研究を進めております。それまでと分野が異なることで研究の幅が広がり、培ってきたことも活かせる栄養化学教育研究分野に正式に採用いただいたことを本当に嬉しく思います。

三翠化学会東海支部 懇親会だより



ミツカンに勤務され、現在は同文庫にお勤めになられておられます。同文庫では古文書を通じて江戸時代の醸造りの方法を研究され、その内容を「江戸時代の醸造り工程と醸造りの装置・道具」にまとめられました。

平成一〇年一月一日付で生物圏生命科学専攻・生命機能化学講座・栄養化学教育研究分野の助教に着任いたしました。

私は三重県出身で、三重大学大学院医学系研究科を修了したのち同生物資源学研究科博士後課程に進学し、平成二十八年に奥村克純先生(分子細胞生物学教育研究分野教授、現・生物資源学研究科長)のご指導のもと学位を取得いたしました。

本過程であるDNA複製を制御する機構の解明を中心に、細胞や動物を用いて研究を行っており、同研究室出身の故郷方進先生や竹林慎一郎先生をはじめとした多くの先生方からご指導をいただいております。学位取得後、当時生物資源学研究室長を務めておられた梅川逸人先生(栄養化学教育研究分野教授)のもと、食品と地域貢献に関わる研究に携わってきました。

現在の研究テーマは、食品やその材料に含まれる成分の分析と、その機能性を細胞や動物を用いて明らかにすることです。その一つとして、自身の出身である

ました。専門用語では、「エピジェネティクス」と呼んでいますが、これは遺伝子のオンとオフを調節し細胞の機能を正常に維持しているために必要な仕組みです。この仕組みがうまく働かなくなると、様々な病気の原因になることが知られています。ライフサイエンスの分野では、研究を進めるために必要なスキルは急速に変わってきています。技術革新は目覚ましく、少しでも気を抜いていると浦

島太郎のような状態になってしまっています。細胞の中で働いている数方という遺伝子やタンパク質分子を網羅的に解析できるオミクス技術が登場し、最近流行りのビッグデータを私たちの分野でも扱う必要も出てきました。

「最近の若者は……」というネガティブな意見がいつの時代にもありますが、学生たちは最先端の物事に敏感で、変化を受け入れられるのが得意です。一〇年、

スポーツ大会

二〇一八年一〇月三十一日、研究室対抗スポーツ大会が行われました。鬼頭健人氏をはじめとした栄養化学研究室の方々が、みなトロフィーを寄贈してくださいました。六チームの総当たり戦で、バレーボールとバスケットボールをしました。先生方も参加してくださいました。大変盛り上がり、中には久しぶりの運動で足を怪我してしまつた先生もいるほどでした。研究室内、研究室間との交流も深まりとても



東海支部では東海三県にお住まいのメンバーを中心に年三、四回、親睦を兼ねた懇親会を開催しております。懇親会では各々の近況をお話しいただく他、開催時にお誕生月の方がいらつしやるとバースデープレートと共に誕生日をお祝いしています。

さて、今回はいつも親睦会のメンバーとしてご参加いただいております一般財団法人招鶴亭文庫の大橋一弘さん(大12)が作成された「江戸時代の醸造り工程と醸造りの装置・道具」をご紹介させていただきます。大橋さんは長きにわたり

一般には馴染みのないものですが、江戸時代の製造工程を誰が見ても分かりやすい文章にまとめられており、作業も一目見て分かるような穏やかな挿絵が多数ちりばめられています。なんとこの写真の挿絵も大橋さんの手によるものです。

私は醸造りが作れるまでの工程を大学の授業で理解していたつもりでしたが、江戸時代のお酒粕を原料に作られており、その工程の複雑さに大変驚きました。原料や資材も無駄なく最後まで利用されており、エコロジとエコノミーの両立がとても素晴らしい、この

私は三重県出身で、三重大学大学院医学系研究科を修了したのち同生物資源学研究科博士後課程に進学し、平成二十八年に奥村克純先生(分子細胞生物学教育研究分野教授、現・生物資源学研究科長)のご指導のもと学位を取得いたしました。

本過程であるDNA複製を制御する機構の解明を中心に、細胞や動物を用いて研究を行っており、同研究室出身の故郷方進先生や竹林慎一郎先生をはじめとした多くの先生方からご指導をいただいております。学位取得後、当時生物資源学研究室長を務めておられた梅川逸人先生(栄養化学教育研究分野教授)のもと、食品と地域貢献に関わる研究に携わってきました。

現在の研究テーマは、食品やその材料に含まれる成分の分析と、その機能性を細胞や動物を用いて明らかにすることです。その一つとして、自身の出身である

ました。専門用語では、「エピジェネティクス」と呼んでいますが、これは遺伝子のオンとオフを調節し細胞の機能を正常に維持しているために必要な仕組みです。この仕組みがうまく働かなくなると、様々な病気の原因になることが知られています。ライフサイエンスの分野では、研究を進めるために必要なスキルは急速に変わってきています。技術革新は目覚ましく、少しでも気を抜いていると浦

島太郎のような状態になってしまっています。細胞の中で働いている数方という遺伝子やタンパク質分子を網羅的に解析できるオミクス技術が登場し、最近流行りのビッグデータを私たちの分野でも扱う必要も出てきました。

着任のご挨拶と自己紹介 栗谷健志



私は三重県出身で、三重大学大学院医学系研究科を修了したのち同生物資源学研究科博士後課程に進学し、平成二十八年に奥村克純先生(分子細胞生物学教育研究分野教授、現・生物資源学研究科長)のご指導のもと学位を取得いたしました。

本過程であるDNA複製を制御する機構の解明を中心に、細胞や動物を用いて研究を行っており、同研究室出身の故郷方進先生や竹林慎一郎先生をはじめとした多くの先生方からご指導をいただいております。学位取得後、当時生物資源学研究室長を務めておられた梅川逸人先生(栄養化学教育研究分野教授)のもと、食品と地域貢献に関わる研究に携わってきました。

現在の研究テーマは、食品やその材料に含まれる成分の分析と、その機能性を細胞や動物を用いて明らかにすることです。その一つとして、自身の出身である

ました。専門用語では、「エピジェネティクス」と呼んでいますが、これは遺伝子のオンとオフを調節し細胞の機能を正常に維持しているために必要な仕組みです。この仕組みがうまく働かなくなると、様々な病気の原因になることが知られています。ライフサイエンスの分野では、研究を進めるために必要なスキルは急速に変わってきています。技術革新は目覚ましく、少しでも気を抜いていると浦

島太郎のような状態になってしまっています。細胞の中で働いている数方という遺伝子やタンパク質分子を網羅的に解析できるオミクス技術が登場し、最近流行りのビッグデータを私たちの分野でも扱う必要も出てきました。

「最近の若者は……」というネガティブな意見がいつの時代にもありますが、学生たちは最先端の物事に敏感で、変化を受け入れられるのが得意です。一〇年、

島太郎のような状態になってしまっています。細胞の中で働いている数方という遺伝子やタンパク質分子を網羅的に解析できるオミクス技術が登場し、最近流行りのビッグデータを私たちの分野でも扱う必要も出てきました。



西尾昌洋(大42)